



2021 年度部会報告（湿地の文化、地域・自治体づくりと CEPA・教育部会）

笹川孝一¹・佐々木美貴²・芝原達也³・田開寛太郎⁴

¹法政大学, ²日本国際湿地保全連合, ³(株)生態計画研究所, ⁴松本大学

1. 2021 年度の概要

定例研究会は、新型コロナウイルスの感染拡大を鑑み、Web 会議システム（Zoom）を使用し、オンライン上で開催した。本稿では各回の概要を示し、発表された詳細な資料については、部会ホームページをご覧ください。

2. 定例研究会の詳細

(1) 第 10 回：2021 年 5 月 20 日

「宍道湖における突発的な水草繁茂と貧栄養化」報告者：國井秀伸氏（島根大学名誉教授）

この研究会では、最初に参加者が知っていそうで実は知らなかった水生植物の定義や形態の特徴、生活帯などについてわかりやすい解説があった。その後、宍道湖における水草の報告例や、2009 年から宍道湖で起こった水草の繁茂状況と貧栄養化について、宍道湖に関連した出来事を含めて報告があった。とくに貧栄養化については、参加者の関心が高く、活発な意見交換が行われた。水質を改善するための水質汚濁防止法などさまざまな法規制、ダム建設、直立護岸などが、貧栄養化を引き起こした原因とされていることなどを学んだ。豊かでワイズユースできる湖沼とするには、バランスが必要なのだと改めて学んだ研究会となった。

(2) 第 11 回：2021 年 7 月 15 日

「東京湾での海苔養殖の歴史と大森 海苔のふるさと館」報告者：小山文大氏（大森 海苔のふるさと館）

江戸時代に始まる海苔養殖の一大生産地であった大田区大森の歴史とその終焉、2007 年に地元の大田区が開設した「大森 海苔のふるさと館」および「大森海苔のふるさと公園」の設置に至る歴史について報告があった。

今回の報告では、『大森漁業史』の編纂など漁業関係者による史料の保存、地元の住民の要望を受けた「大森 海苔のふるさと館」の設置によって、“過去と未来をつなぐ”という理念のもと、歴史を伝えることに留まらず、自然と人が共に暮らしてきた歴史を現在の人々の暮らしに活かすことの重要性を改めて学ぶ重要な機会となった。

(3) 第 12 回：2021 年 11 月 18 日

「立山弥陀ヶ原大日平における博物館・観光の役割～その魅力とポテンシャルをどう伝えるか～」報告者：飯田 肇氏（富山県立山カルデラ砂防博物館）

弥陀ヶ原、大日平に見られる広大な台地は、悠久の時を経てかたち作られ、世界的に見ても非常に魅力的な自然環境である。立山には湿地、地質・岩石を基盤とする「自然の多様性」が比較的狭いエリアに凝縮される。ラムサール条約登録湿地やジオパークサイトを活かした旅行や観光分野の取組みに力を入れるとき、地形の成り立ちや人と自然の営みなどの秘密や面白さが「物語」として重要な意味を持ち、さらに観光客の満足度にも大きく影響すると思われる。立山における観光産業の現在、「知るともって面白い」ストーリーづくり、ビジターセンターや博物館等の教育施設の在り方、山岳ガイドやナチュラルリスト等の人的資源のネットワーク化等について、議論は盛り上がった。

3. 今後の予定

引き続き、Web 会議システム（Zoom）を活用して、より多くの人の参加を可能にするよう努める。定例研究会の詳細が決まり次第、学会のメーリングリストやホームページ等でお知らせするので、ぜひ参加いただきたい。